都道府県名	東京都

Ⅰ　学校の概要（平成１５年４月現在）

学校名	大田区立入新井第一小学校								
学　年	1年	2年	3年	4年	5年	6年	特殊学級	計	教員数
学級数	3	3	2	3	2	2	4	１９	２８
児童数	９３	８５	７９	８２	５９	６２	１９	４７９	

Ⅱ　研究の概要

１．研究主題

自ら考え、自ら学ぶ力の育成
―「できた、わかった」ことが実感できる授業―

２．研究内容と方法

⑴　実施学年・教科

・全学年で算数科を実施
　児童の実態「算数がよくわからない」を早急に改善する必要を感じたこと、更に、大田区の方針で区内の全小学校で算数の習熟度別少人数学習を実施することになったこと、及び教科の構造からみて１年から６年まで全校で取り組むのに取り組みやすいと考えたから。
・全学年で総合的な学習の時間にフレンドシップ・サポート・プログラムを実施
　全校の学級経営を充実させることが、学力向上の基礎になると考えているから。

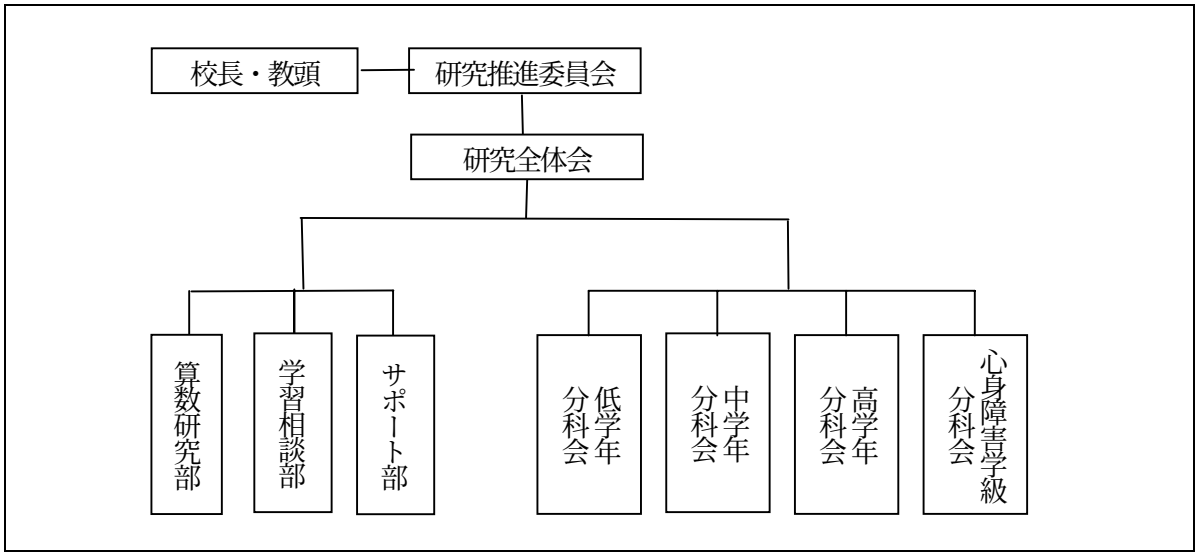
⑵　年次ごとの計画

平成14年度	○テーマ 「気付き、感じ、伝え合う喜び―話したくなる・聞きたくなる心の動きのある学習活動の実践を通して―」 ○仮説 ①思わず「話したくなる」「聞きたくなる」ような経験とそれを表現することができる場を設定する。 ↓ ②自分の思いを受け止めてもらえる経験（聞き手も育てる）。 ↓ ③話し手と聞き手の信頼関係の高まり（人間関係の深まり）。 ↓ ④学習に対する積極的な気持ち（主体的な学習への意欲）。 （①に戻る） このサイクルを確立し、学習への意欲を高めつつ、人間関係を深めることで太田がKを尊重し合いながら学習や生活に取り組むことができるだろう。それは、少人数での習熟度別学習においてもお互いの学習を認め合うことにつながる。更に、今年度の心の動きのある学習を通して培われた「話す・聞く」の力と、より良い人間関係からくる精神的な落ち着きは次年度以降における基礎基本の定着や学力向上の礎となるとともに、日常生活に生きて働く力となるだろう。 ○研究内容・方法 個に応じた指導のための指導方法・指導体制の工夫改善を中心に・・・ ①国語科の「話す・聞く」の特設単元を主に各学年で授業研究や教材開発を行う。 ②「話す・聞く」の日常における取り組みについて系統性のある計画を立てる。 ③児童が自らを振り返り、向上しようとするきっかけとなる自己評価･相互評価と児童の力を伸ばす教師の評価。 ④学級集団の向上に寄与する補助的手法（フレンドシップサポート等）の教育課程における位置づけと年間指導計画の作成を行う。 ⑤少人数指導や習熟度別学習を行うための算数科の指導計画作り。

平成15年度	○テーマ 「自ら考え、自ら学ぶ力の育成ー個に応じた指導のための指導方法・指導体制の創造を通してー」 ○仮説 　基礎的・基本的な学力の定着には、児童が主体的に学習に取り組むことが必要である。そのために、学び方(学習方法＝学習計画力を高める、学習を振り返ることができる、学習の方向を修正できる)を身に付けさせ、学ぶ力を育成していくことが重要と考える。それらを算数科を中心に、個に応じた指導体制を進めていく。さらに、児童の学習へのつまずきに対する対応（学習相談日の設定）や家庭学習に取り組む方法を示すことで、児童の総合的な学力の向上が期待できると考える。 ○研究内容・方法 ・少人数指導に取り組むための算数科指導計画の作成。 ・レディネステストの作成とそれを生かした指導計画の作成。 ・補充、発展教材の作成。 ・モジュールの学習時間での「話す、聞く」への取り組みの継続。 ・児童のつまずきへの対応（学習相談日の設定、外部団体との協力） ・家庭学習への取り組む方法の確立。 ・フレンドシップサポートの取り組みよる学習環境の安定化。 ・評価を積み重ねることで児童の変容を明かにし、数値データを残す。 ・保護者に児童の学力の変化に対する意識のアンケートを行う。

平成16年度	○テーマ 「自ら考え、自ら学ぶ力の育成ー少人数指導の特性を生かした学習を求めてー」 ○仮説 　１５年度の研究をもとに、少人数による児童相互の話し合いを重視した学習及びノート指導、家庭学習に取り組むことで、更に児童が主体的に取り組む力が高まり、学力の向上につながると考える。 ○研究内容・方法 　１５年度の研究を更に深めていく（ノート指導、家庭学習の徹底を含む)。

(3)　研究推進体制



Ⅲ　平成15年度の研究の成果及び今後の課題

1．研究の成果

・指導計画、固定時間割の作成による計画的な指導ができた
・コースごとの目標設定による習熟度に応じた指導ができた
・教材研究、指導法の工夫など教師としての力量が向上した
・個に応じた見取りと支援の意識が高まった
・教師としての指導の基礎基本の重要性を確認できた
・算数が好きになり、分かるようになった児童が増えた
・授業中に質問をすることができるようになった児童が増えた
・児童は、自分にあったペースで学習を進められるようになった
・学習相談を通して、自分の苦手なところが分かり、それを克服するために努力する児童が増えた
・児童は、フレンドシップサポートプログラムの取り組みにより、他者を認めること、協力すること、思いやりの心、温かいことばかけの大切さよさを実感できた

2．今後の課題

・少人数指導の体制は整ったので、少人数ならではの子ども同士の係わり合いを重視した算数科の授業を追究する。主に、問題解決活動の練り上げ段階の指導について研究を深める。
・算数科において、児童の思考の過程が分かり、自らのつまずきに気付けるようなノート指導の在り方。中学校数学教育との連携（校区の中学校と）も図る。児童の思考を深めるような発問、板書の在り方も。
・全校を挙げて家庭学習の習慣化を図り、主体的な学習のあり方を追究する。
・学習相談のより一層の定着化と指導人員の確保のための工夫をする。

Ⅳ　学力等把握ための学校としての取組

・各単元ごとにレディネステストを実施し、単元終了後に定着度を測るためのテストを実施している。
・学年末（２月末予定）には、該当学年の指導内容の定着度を測るために標準学力テストを実施する予定。
・市川伸一先生（東京大学大学院教授、本校学習指導カウンセラー）開発の学力診断テストを、５年生で実施する予定。（２月）　算数学力を構成している認知的要素を診断するもの。

Ⅴ　フロンティアスクールとしての研究成果の普及

＊平成16年1月23日(金)研究発表会を通じて、研究の成果と課題等を大田区はもとより、全国から集まった先生方に報告した。400名以上の教員が参加。
＊研究の報告は、パンフレットにして大田区中の小学校に配布した。また、ＨＰでも研究の結果だけでなく、研究授業の指導案、資料、その他指導計画等をＰＤＦにてダウンロードできるように公開している。
＊本校の学習相談の考えを広めるために、学習相談研究会を立ち上げ、月に１回、区内の小中学校の教員を中心に、他区の小中学校の教員も交え、市川伸一先生を顧問に、研修を深めている。
＊平成16年度は、全ての研究授業（算数及びフレンドシップ・サポート）及び協議会をオープンにし、その都度本校の取組について普及に努め、その結果をＨＰに掲載する。また、年度末にはパンフレットを作成し、区内全校に配布する予定である。

◇　次の項目ごとに、該当する箇所をチェックすること。（複数チェック可）

【継続校】　　14年度から
【学校規模】　１９～２４学級
【指導体制】　少人数指導　　Ｔ．Ｔによる指導
【研究教科】　算数・その他（総合「フレンドシップ・サポート・プログラム」）
【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】　　有